

2026.7.17

お茶高 SSH 企画「研究者にインタビューしてみよう」は、様々な分野で活躍する研究者に生徒がアポをとってインタビューし、そこで得たものをまとめ、全校生徒に向けて発信するプロジェクトです。ここでは 1 年生 5 名が 2026 年 7 月 3 日、東京大学哲学研究室 鈴木泉先生にインタビューした内容をご紹介します。

鈴木 泉先生(東京大学大学院人文社会系研究科哲学専修課程)

○先生のご研究

鈴木先生は東京大学の教授として、デカルト、スピノザを中心とした西欧近世哲学やドゥルーズなどの現代フランス哲学を中心に研究をされており、『スピノザ全集』などの書籍の編集・翻訳にも関わっていらっしゃいます。先生は、「変容」というものを一つのテーマとして、人間が「固定」しない生き方で生きていくにはどうしたらよいか？という問いを考えていらっしゃるそうです。近年は個人の個性やアイデンティティを大切にする考え方が一般的ですが、個性・アイデンティティを大事にしよう、と掲げすぎること、かえって「個性・アイデンティティとはこういうものだ」というイメージがついてしまいます。これが「固定」です。鈴木先生は人がこの「固定」から逃れるためにはどうすればいいのか、自分や社会が変化していくとはどういうことなのかについて考えていらっしゃるそうです。(※ここではあくまでも鈴木先生の考え方を紹介しただけであり、「固定」を重要視するか、「変化」を重要視するかは人それぞれの考え方です。)

○インタビューでうかがった内容

Q. 哲学の研究はどのように行われるのですか？

A. 研究する上での基盤になる基礎研究は文献調査が中心であり、過去の哲学者たちがどのようなことを言っているのかを理解することからはじめて、そこから過去の哲学者の考えを自分なりに咀嚼し、自分の考えを発展させていきます。そして、現代の問題などについて議論を進めていきます。理論を組み立てて、戦わせることが一種の実験であり研究です。

Q. 哲学の面白さとは何ですか？

A. 自分がいかにして自由になれるのかを考えることができるのが哲学の魅力です。また、自分自身に問いかけることで自分を変えることができます。それをできる人は少ないですが、過去の哲学者から学ぶことで、新たな考え方など、本当に何かを作ることができるのが哲学の面白さです。

Q. 哲学を学ぶ際、何から入ればいいですか？

A. 入門書を読んだりすることも悪くはないですが、それだと分かった気にはなりますが、「哲学する」ということが身につくとは限りません。音楽だったらバッハやモーツァルトの曲を実際に聴いてみることに、哲学を実践している人、過去の哲学者の翻訳された本などを読むことが良いでしょう。初心者におすすめなのはプラトンという哲学者の対話編。女性の哲学者はまだ少ないのですが、最近お亡くなりになりましたが、石黒ひでさんという世界的にとっても有名な日本の哲学者がいらっしゃいますよ。

Q. 答えのない問いに価値はあるのですか？

A. 「問い」に対して一つの完璧な答えは決まらないことが多いですが、議論を重ねていくうちに最終的にはある方向の意見へ収束していくものです。だから、収束を期待しながら議論を続けることで価値が生まれていくと思います。あるいは、対立する答えが何に由来するか、ということを明らかにするというのも大事でしょう。自分の意見を適当に述べるだけではよくないですね。議論の回数を重ねることで議論のポイントを明らかにしていくことが大切だと思います。

Q. 先生が研究において大切にしていることは何ですか？

A. 同じ哲学を研究している人の中でも、合意を好む人もいます。しかし、無理に誰かを説得しよう、合意を求めようとする必要はないと思います。美術で例えるなら、ゴッホの絵を見たときに、その絵の様々な解釈について自分の考えを相手に伝えて説得しようとするのではなく、「ゴッホの絵を見たらそれだけで価値がある」と考えるのと同じことです。

○私たちに向けてのアドバイス！

若いうちに、自分の可能性について考えておくことが大切です。そしてその「可能性」は「他のものになる」という可能性であるとも言えます。よく「赤ちゃんは可能性の塊だ」と言ったりしますが、赤ちゃんは生まれたばかりで何も分からず、言ってしまえばまだ選べる可能性、つまり中身がない状態であるに過ぎません。それに比べて、高校生のような年齢は様々なことを学び、社会について知り、一番可能性を持った状態であるといえるでしょう。

そこで重要なのは自分の可能性の幅を狭めすぎないということです。自分の可能性は最大限開いておくことが大切です。たとえば恋愛においても好きな人は探そうとして見つけるものではなく、向こうから勝手にやってくるものであるように、自分のやりたいこと、どれを選ぼうかと模索する中で、向こうから訪れるものです。自分が「これだ！」と思えるものに出会えることこそが幸せなのです。出会いは高校生～20代に訪れることが多いもの。その「やりたいことに出会う」ためには、自分の可能性を最大限開いておいて、好奇心を持ち様々なものと触れることがとても大切だと考えています。



インタビュー中の写真と、先生との集合写真

***鈴木先生、お忙しい中ありがとうございました！**